

仮面ライダーシンカ

クレナイハルハ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、青年は謎の大きなメモリーを手にした

それから数年、青年の運命は動き始めようとしていた

これは、新たなヒーローの誕生の物語である

6	5	4	3	2	1
54	47	33	25	11	1

目次

夕方、人気のない公園、小学生ぐらいの少年と黒いコートに黒い帽子、そしてサングラスを掛けた男が話していた

「少年、君の夢はなんだい？」

その質問に一瞬考え込んだ少年だったが、少年は目を輝かせながら答えた

「■■■■■■■■■■！かっこいいし、つよくてやさしい、そんなふうになりたい！」

「そうか！なら、これのボタンを押せ！そうすれば君は望んだようになれる」

「ほんとうに？」

「ああ、本当だよ。さあボタンを押すんだ」

「うん！」

元氣よく返事をした少年はそれのボタンを押した

青年が目を開くと、毎朝見る天井が目に入った

「変な夢……だったな」

そう呟き、棚に置いてある大きめのメモリーのような物を見た

僕の名前は神城^{かみじょう}心^{しん}。高校三年生で一応学生だ

普通なら学校へいくのだろうが、高校三年の僕は学校には行かなくてもよく、祝日のため、ゆっくりと服を着替える

いつもどおりに朝食を食べ、ふと目に写った本棚からふせんや、しおりが大量に着いている雑誌を取り出す

「あ、このケーキ食べたいなあ」

青年が取り出したのは、スイーツの作り方や画像の載った雑誌だった

「今日はチョコレートケーキにしよう」

そう言って調理器具を取り出す

そして、手慣れたようにケーキを焼きチョコレートを塗り最後に切ったイチゴを大量にトッピングする

青年の夢は今は小さなケーキ屋さんを開くことである、その為にこうして練習している

そもそもケーキを作るように成ったのは、ある作品に出てきた社長さんが作っていたケーキが美味しそうだったからである

それに、あのテレビシリーズに憧れたのなら料理は一通り覚えないとね、それに独り暮らしだとその方がいい

「よし、出来た……」

そう言って時計をみると、朝起きてから二時間ほどたち、10時になっていた

「この量は……また作りすぎた」

チョコレートケーキを作ったのはいいのだが大きめに作りすぎてしまった

普通なら誕生日のケーキぐらいの大ききをつくるのだが、この青年は縦10センチ、横30センチサイズの特大なケーキを作っていたのだ

「……また大きく作りすぎちゃった」

この青年、ケーキを作るとき無意識に大きく作ってしまったのだ

あれから、少しでも量を減らそうと食べたが全然減ったように見えない

どうしようか、このままだと腐っちゃうし

「……よし、お隣さんにあげよう」

最近、隣に外国の人が引越してきた。アザゼルと言うらしく日本語が凄く上手いので話しやすい

近くの駒王学園に務めてるらしく、僕の友達の一人の部活顧問らしい

僕はその近くにある私立パティシエ専門高等学校に進学したため、彼の話の時々聞いていた

それに、よくボットやアニメについて話し合うときがあり仲はいいと思う

出来たチョコレートケーキに包丁を入れて4等分する

そして、一つを皿に移してラップをかけアパートを出る

隣の家の前に行き、扉をノックをする

「アザゼルさん、いらっしやいますか？」

すると、少したつとドアを開けるアザゼルさんが出てきた

「こんにちわ、アザゼルさん。朝早くにすいません」

「おう大丈夫だぜ、シンどうしたんだ急に？」

「実は、ケーキを作ったんですけど大きく作りすぎちゃって、よかったらどうかと思ってる」

そう言つてケーキを乗せた皿を差し出す

「お、うまそうだな！ありがたく貰うぜ」

「はい、よかったら後ろの子と一緒に食べてください」

「は？子？」

「え？あの子ですけど、違うんですか？」

そう言つて、先程からアザゼルさんの後ろにちよこんと立っている
ゴスロリを来た少女を指差した

「な！オーフェイス!?!おま！」

「アザゼル、我、来た。早くそれ食べたい」

「えーと？」

「す、すまねえなこいつはオーフェイスって俺の知り合いから預けられたんだ」

「そ、そうなんですか。それじゃ僕はこれで」

「おう、じゃあな」

そう言つて僕は自分の部屋の扉を開け中に入る

途中『お前！いきなりくるなつていつたろ！』『アザゼル、そんなことより食べる』と言つた会話が聞こえたが、まあ気にしなくていいか
それに、まだまだケーキは余ってる

まだ一人で食べるのは辛い量だ

「そうだ、友達にあげよう」

100円ショップで買ったケーキをいれる紙箱を組み立て、中に
ケーキを一人前に切つて何個か入れる

スマホで食べそうな二人の知り合いに連絡を入れて、もう一つは今
から家にお邪魔して届けよう

小さめの保冷バックに保冷剤を大量に入れてケーキの箱をいれる

そしてその保冷バックの入り口リュックを背負つて外に出た

アパートから少し歩き、住宅街。

そして『兵藤』と書かれた家に入りインターホンを押す

——ピンポン——

「はーい、あらー！心くんじゃない！久しぶりねえー！」

すると、直ぐにドアをが空き兵藤君のお母さんが出てきた

「はい、お久しぶりです」

「一誠に用事？」

「いえ、実はですね」

そう言つてリュックを下ろし中の保冷バツクから一つケーキの入った紙箱を取り出す

「そう言えば、前より靴が増えてる？」

「お客さんかな？」

「チョコレートケーキなんですけど、作りすぎてしまつて、良ければ皆さんで」

「そう言つてケーキの入った紙箱を渡す

「あらー！美味しそうね、さすがパティシエ専門校の生徒ね」

受け取りつつ、頭を撫でてくる兵藤君のお母さん

「あはは、味は確かですよ」

「一誠、心君よー」

すると、一誠君が玄関に歩いてきた

「心兄さん！」

「やあ一誠君、久しぶりだね」

「ほんとだよ！パティシエ専門校に行ったつきりで連絡もないし」

「あはは、そうかな？まあ、外国で専門知識とか技術覚えるのに必死だったからね。」

「大変だったんだな、心兄さん」

「まあ、三年だからもう学校は行かなくてもいいんだけどね」

「そうなのか!？」

「うん、僕の高校は三年生の間は基本的に自由出席だからね、それはそうと一誠君。今日は凄く靴が多いけど、友達でも読んでののかい？」

「まあな、部活の友達が三人来てるんだ」

「イツセーさん、どうかしたんですか？」

そう言つて廊下から金髪の美少女が、現れた。

「あ、アーシア！ちようどよかった、心兄さん彼女は俺の部活の」

「アーシア・アルジエントです！よろしくお願いします！」

「ど、どうも神城 心です。それにしても日本語がお上手ですね」

「へ？あ！、ありがとうございます！」

「一誠君、お母さんにケーキ渡したからよかったら皆で食べてね」

「ありがとな！心兄さん。あと来週、俺の先輩が誕生日なんだ、ケーキを作つてくれよ」

「わかったよ、それじゃあ後でどんなケーキがいいのかメールしてね。それじゃ」

「え！上がらないのか？」

「うん、少し用事が会つてね」

「そっか、じゃあまた今度遊びに来てよ心兄さん！」

「考えておくよ」

そう言つてリュックを背負い、一誠君の家を出るとスマホが震えた
スマホを開くと、先程連絡した知り合いからだつた

【今、公園にいるのでそこに来てもらえますか？】

なるほど、ならいくかな

そう思い、リュックを揺らさないよう注意しながら走つた

公園に入り、息を整えつつ。

おそらく彼女がいるであろうベンチに向かうと無表情で白髪の少女が座っていた

「やあ、塔城ちゃん」

挨拶をしながらベンチに座る

「待ってましたよ神城さん、今回は何を作りすぎたんですか？」

「あ、あはは……ちよつと待ってね、いま出すから」

そう言つて何処と無くそわそわしている塔城さん

視線は僕のリュックに注がれている

そんなに楽しみなのかな？

そう思いながらリュックをおろして中からケーキの入った紙箱を一つ取り出して渡す

「……冷たい」

「そりや保冷バツクに入れてきたからね、今回はチョコレートケーキだよ」

「ありがたく頂きます」

「ありがとう、助かるよ。それじゃ」

「……もう行っちゃうんですか？」

「うん、まだ用事があつてね」

そう言つてスマホを確認するともう一人の知り合いから連絡が来ていた

「わ、わかりました。えっと、駅前で待つてますね」

スマホをポケットに入れベンチから立ち上がる

「それじゃ、またね」

そう言つて手を振りながら、今度は駅前へと走り出した

人で溢れ変える駅前、僕は人混みを避けつつ約束の場所へ向かう
すると、帽子を深く被りポスターのはみ出たリュックを背負ったオタクの姿をした少女のような男の子がたっていた

「おーい！」

そう言いながら近付いていくと、彼も俺に気付き手を振ってきた

「し、心さん！」

「お待たせ、ギヤスパー君」

「はい、秋葉の帰りにメールに気づいてよかったです」

話を聞きつつ、リュックから最後のケーキの入った紙箱を取り出す

「はいこれ、メールでも言ったけど作りすぎちゃってね」

「わあ！美味しそうです！」

「あはは、早めに食べてね」

「はい、今日の晩御飯のデザートにたべますう」

「ありがとうね、それじゃ僕は帰るよ」

「は、はい！さよならです」

ギヤスパ―君と別れ、僕はアパートへの帰り道を歩く

「どうにかケーキを消費できた、それにしてもどうして僕はケーキを作りすぎちやうんだらう？」

そんなことを考えながら、近道しようと公園に入る

「そう言えば、今日の夢で出てきた所。ここら辺だったような」

そんなことを思いながらポケットに入れている大きなメモリーの
ようなものを取り出す

幼い時に公園で寝てしまったことがあった

その時、親が迎えに来て怒られた

それはそうだ遅くまで帰ってこないと思っただらベンチに横になっ
て寝てるんだもん

でも、その時に僕はこの大きなメモリーのような物を握ったまま寝
ていたらしい

「一体何なんだろう？」

そう思いながらメモリーのあちこちを触ってみると、なにやらボタンのような物を見つけた

「ボタン？でも押していいのかな」

あくまでもこれは拾い物、何があったら怖いなあ

でも、押してみたい

……一回ぐらい、いいよね？

「おしちやえー！」

『く■■■■！』

「グウ！うあああああああああああ！！」

なんだこれ！頭が痛い！誰か、助けて

痛む頭と共に意識が遠退いていく

最後にみたのは、怪しい男の影だった

「ようやく押したか、それじゃ頼むよあの世界を。この世界の■■■■君」

心 s i d e

真つ暗な水の中

沈んでいくようなら感覚に陥るが、なぜか僕は動こうとしない

あのときは、無邪気だった

あの作品を信じて、きつとなれると信じていた

ても、どれだけ僕が努力しても

どれだけあの人達のように成ろうとしても

■■■■に成れないと何処かで諦めている自分がいた

改めてそのことを理解すると、体が無気力と絶望が襲った

——しよせん空想の存在だろ？なれるわけない——

空想、なんかじゃない

——お前まだ信じてるのか？いい加減に現実を見る！——

信じていれば、信じていればなれる、、、

なれない、そんなこと分かってるんだ

僕は、僕は……■ ■ ■ ■にはなれない

いつのまにか、僕の理想は変わった

お菓子作りに熱中しパティシエを目指した

そうすることで僕のケーキで皆の、笑顔を作ろうとした

でも、そうなつたいまでも

僕は心の何処かでありたいとそう思ってる僕がいた

「ああ、僕は」

目が覚めると、そこは森だった

周りを見ても、そこには木や草などが広がっていて、奥を見ても木があるばかり

「何でこんなところに」

僕は確か、ケーキを配った帰りにあのメモリーのボタンを押して、頭痛で倒れたんだっけ？

「なんだこれ？」

腰に何やらゴツゴツしたデザインのベルト？のようなものが置いてあった

「そうだ、携帯は」

そう言つてポケットに入れてあったスマホを取り出して、画面を見ると圏外になっていた

「圏外、、取り敢えず壊れてなくてよかった。リュックの中を確認しよう」

財布、常に持ち歩いてる通帳やはんこ

もしもの時の為の絆創膏や包帯、そしてケーキを入れていた保冷バックと中の保冷剤

「持ち物は全部無事つと」

取り敢えず、その場にいたら色々とやばそうなのでリュックを背負い、森？を進む

おかしいなあ、駒王町の公園つてこんなに自然で溢れてたっけ

そんなことを考えつつ、木や草等を避けながら進むと、大きな湖に出た

「ここ、、、絶対駒王町じゃない」

ならここは一体どこだろう？

そんなことを考えつつ周囲を見回す

すると、少し先で少女が遊んでいるのが見えた

やっと人を見つけた、彼女達たちに近くの人がいるところに連れて行って貰おう

「おーいー君、ここが何処か教えてもらってもいい？つて、、、え？」

近くまで来て気づいた、彼女には羽があるのだ

しかも、空を飛んでるのだ

おかしい、僕はまだ夢を見ているのだろうか

「あのくお兄さん？」

「ああごめんよ、所で君ここが何処なのか知らないかい？」

「紅魔館近くの湖ですけど、お兄さんはどうしてここに？」

「実は、公園で倒れたんだけど目が覚めたらその森に倒れてたんだ」

「お兄さん、外の世界の人ですか!？」

「そ、外の世界? どうゆうこと? ここは駒王町じゃないの?」

「くおう? 違いますよ、ここは……」

——幻想郷です」

「幻想? つまり僕は異世界に来たのか」

「多分そうだと思います」

なんとゆう事だ、ラノベで有名な異世界転移を経験してしまった

「そっか、元の世界に戻る方法はあるのかな」

「そ、それなら、博麗神社にいけないと思いますよ?」

「博麗神社?」

「はい、外の世界の人はそこに行つてこの世界に留まるか、元の世界に帰るか決めるんです。」

取り敢えずそこに移動した法が良さそうだな

「お兄さん、よかつたら案内しましょうか?」

「それじゃあお願いしようかな、僕は心、神城 心」

「私は大妖精です」

「分かった、改めてよろしくね大妖精ちゃん」

「大ちゃんです、その方が言いやすいでしょうし」

「分かったよ、それじゃあ行こう」

そうして、僕は「大妖精に連れられ博麗神社へと向かった

長い階段を登り、神社につく

「ここが博麗神社か」

「はい、巫女の霊夢さんに話をすれば元の世界に帰れるはず……です」

「そっか、ここまでありがとうね」

「はい、それじゃあ」

そう言つて大妖精ちゃんは飛んでいった

「……………せっかくだし参拝しよう」

そう言つて神社に近付き、賽銭箱に元の世界に帰れるよう祈りながら一万円を入れて手を合わせる

「どうか、元の世界に戻れますように」

もしかしたら誰かが心配してるかも知れないし

拝み終わり、後ろに気配を感じ振り替えると

特徴的な巫女の用な服を来た少女がたっていた

「あんた！今一万円入れなかった!？」

嬉々として迫る少女に少し驚きつつ、僕は口を開いた

「そ、そうですけど」

「やったわ！あんたいい人ね！」

「ど、どうも……あの貴方は？」

「私は博麗 霊夢この神社の巫女をしているわ」

「貴方が霊夢さんですか？」

「ええ、そうよ。何？妖怪退治の依頼とかで来たの？」

「いえ、実は僕この世界に迷いこんでしまったみたいで」

「つてことは外の世界の人つてこと、なるほどね。それでどうするの？」

「え？」

「ここの記憶を忘れて元の世界に戻るか、このまま幻想郷に留まるか」

幻想郷、少し興味を引かれるけど

一誠くんたちに心配をかけるわけには行かない

帰らないと

「出来れば、帰りたいです」

「分かったわ、少しまってね」

そう言つて霊夢さんは神社の鳥居に何やらお札のようなものを張り付けた

「これで鳥居を通ればあんたのいた世界に戻るわ」

「ありがとうございます、お世話になりました」

「ええ、お賽銭ありがとね」

それを危機ながら鳥居を潜り抜け、僕は元の世界にかえ……、らなかつた

「あれ？」

鳥居を潜り抜けると、先程登ってきた階段

振り返れば先程見た神社にポカンとした顔をする霊夢さん

「あの、帰れてないんですけど」

「あんた、普通の人間じゃなくて能力持ち？」

「の、能力？そんなのないと思うけど」

「幻想郷に迷い混む人ってほとんどが何かしらの能力持ちなのよ、例えば『空を飛ぶ程度の能力』とかね、少し失礼するわよ」

そう言って霊夢さんはお札のようなものを僕のおでこに張り付けた

「ふむふむ」

「あ、あのくこれって何を」

「このお札であんたの能力を調べてるのよ」

「な、なるほど」

その状態で二、三分ほどすると霊夢さんはお札をはがした

「大体分かったわ、あんたの能力は『進化する程度の能力』よ」

「し、進化?」

あの作品の内の一人にそんな人がいたっけ?

能力があることに少し驚いたけど、それよりは帰れないことの方を
考えなきや

「だとすると、その能力のせいで帰れないと?」

「ええ、取り敢えず今日はうちに泊まってきなさい」

「え!でも独り暮らしの女性の家に泊まるなんてその……いいんですか?僕としては助かるんですけど」

「別にいいわよ、ほら上がって」

「は、はい」

そういえば僕の家鍵開けっぱなしだ

それに机の上には一昨日、悲しいラノベを読んだときのテンション
で書いた遺書のような手紙が置いてあるんだよなあ

誰も見ないといいんだけど

次の日、僕は霊夢さんに連れられ人里を見に来ていた。

この世界に住むとなると家が必要になるので紹介してもらって
いた

「この家とかいいんじゃない?」

「そうですね、これを少し改築して店ができるようにできますか」

「はい、わかりました。明後日までには終わるので、明後日に来てくだ
さい」

「ありがとうございます」

そう言っ店を出ようとしたその時だった

「博麗の巫女様!!」

外から一人の男性が慌てたように入ってきた

「町にいた一人が突然暴れだしたんです、あいつ負担は気弱だから妖
怪に取りつかれたんじゃない」

「分かったわ。心は先に神社に戻ってて」

「え!でも!」

「いい!それじゃ案内しない」

「へ、へい」

そう言っ二人は走っ外へ出ていった

何か、嫌な感じがする

二人を追っ走っいくと、一人の男性が暴れているのが目に入っ
た

「うがああああ!全部!全部全部全部削除してやるうううううう

「！」
そう言つて暴れまわる青年、確かにまるで何かに取りつかれたように見える

「あんた！もうやめなさい！これ以上するなら実力行使するわよ！」

そう言つて霊夢さんはお払い棒とお札を構える

「博麗の巫女おお！邪魔するなら、お前も削除してやるううううう！」

そう言つて青年は僕の持っているメモリーと違う色のメモリーを取り出してボタンを押した

『デリートオオオ！』

それと共に青年が黒い霧に包まれ、それが晴れると底には虎のような鋭い爪を持った怪物が立っていた

『うがあああああ！』

そう言つてさらに暴れまわる

「何だよ、、、あれ！」

僕が使ったときは頭痛がしただけだったのに

一歩間違えれば僕も

「嫌な妄想はやめろ！」

そう言つて頭を振つて考えを消す

ちょうどその時、怪物が霊夢さんの放った段幕を一振りで消し去っていた

「なっ!？」

『うああああああ！』

「っ!？」

怪物が長い爪で霊夢さんを切り裂こうと腕を横に振るうのを、しゃがんで避け距離をとる霊夢さん

だが、怪物はそれを予測していたかのように霊夢さんを蹴りつけ、吹き飛ばした

そこにいた人々のほとんどが逃げだす

「キヤー！」

その時、一人の少女が何かに躓き転んでしまう

それを見る怪物は、口をニタリとしながら爪を構えゆつくりと近付

く

その少女は、ゆつくりと後ずさるが怪我をしたのか立ち上がれず泣きそうになっていた

ダメだ、何とかしなきゃ

僕は近くに転がる石を掴み取り、怪物に向けて投げる

石は綺麗に怪物の頭、後頭部にあたった

それにより、少女から僕に標的が写る

「お前の邪魔をしたのは俺だ！こっちに来い！」

そう言っ僕は森の方へと走る

ちらりと後ろを見ると怪物は僕以上の早さで近付いてきていた

よし、追ってきた

あとは必死に走るだけだ！

恐怖心を押さえつけ、必死に足を動かし森に入る

『ちよこまか、うざいんだよオオオオオ！』

木や草等を使いどうにか怪物からの攻撃を避ける

「はあ、はあ、嘘だろ!？」

その時、ちようど広場らしき所に出てしまった

ちようどその時、怪物が僕に追い付いた

『鬼ごっこはこれで終わりだなあ?』

「くっ!」

『死ねえエエエ!』

そう言っ怪物が腕を振り上げる

もし僕に力があつたらな

・・・みんな、ごめんね

一誠、どうか僕の分まで生きてくれ

『グア!?!』

その時、怪物が急に吹き飛んだ

見ると、僕のポケットに入っていたメモリーが淡く光り放ち僕を守るかのように中に浮いていた

「メモリーが!？」

『~~~~!~~~~!』

すると、リュックから謎の音声の流れる

急いでリュックの中を見ると、倒れたときにあつたベルトのような物から音が出ていた

「これは、」

もし、僕の想像通りならもしかして

ベルトを試しに腰に当てるとベルトの左右からベルトが延びて固定される

「うぐっ!？」

すると、少しの頭痛と共にベルトの使い方が頭に流れてくる

「っ！このベルトは、」

僕は、とあるヒーロー達に憧れた

本気でなれると信じていた

だが、現実を知り、諦めてしまった

そんな僕にでもこれを使う資格があるのなら

「僕は、もう諦めない」

あなた方の名前を使わせていただきます

中に浮かぶメモリーを掴み取り、ボタンを押す

『シンカー!』

メモリーをベルト「シンカドライバー」の左側に読み込ませるようにタッチする

『シンカー!』

『カメン・ライダー・カメン・ライダー・カメン・ライダー』

音声があつたら、メモリー「シンカメモリー」を横から装填する

『シンカー!』

『ヘンシン♪ヘンシン♪ヘンシン♪ヘンシン♪』

右手を天へと伸ばし、ゆっくりと降ろす

「変身!」

ベルトの中央上のボタンを叩くように押す

『インストール!』

その音声と共に体を青と黄色を基準としたライダースーツが包む
『カメンライダー……シンカー!』

『変身、、出来た、これなら止められる!』

『何だよ!何なんだよお前は!』

『俺は、シンカ!仮面ライダーシンカだ!』

『シンカだか何だか知らないが、邪魔するなあああ!』

怪物に再び腕を振り上げる

僕はベルトの左横にあるメモリーケースにある3つの内、1つを手に取り

ボタンを押し、ベルトの左側にある装填する二つのうち左側に装填する

『スラツシユ!』『リアライズ!』

その音声と共にベルトからロングソード型の剣が現れる

『シンカスラツシヤー!』

シンカスラツシヤーの柄を掴み取り、そのまま上に振り上げて爪を弾く

『でりやあ!』

そのまま回転して怪物の腹を2度切り裂く

『がつ!うがあああああ!』

怪物が爪を横に払うのをしゃがんで避け、再び剣を振り上げて爪を切断する

『っ!俺の爪が!』

僕はドライバーからスラツシユメモリーを取り外すとシンカスラツシヤーが粒子になって消える

『終わらせる!』

メモリーをメモリーケースに戻しベルトの中央部のボタンを押す

『シンカ!』

『アタック!アタック!アタック!アタック!アタック!』

その音声と共に脚部に力を溜める

動かないことをチャンスと思ったのか怪物が突進してくる

ボタンをもう一度叩くように押す

『シンカブレイク!』

『はああ、でりやあ!』

怪物が手前まで来たところでジャップして横蹴りを喰らわす

『がつー!』

怪物が吹き飛ばされ倒れると、黒い霧が霧散していき元の人間の姿に戻った

『どうにか、止められた』

そう呟きつつ、あの人が持っていたメモリー

デリートメモリーを拾う

『さつきと違う』

先程の人間が怪物になったときは、メモリーの所々に血を思わせるような線が着いていたが、倒したら消えていた

『一応、回収しとこう』

このメモリーが他の人に渡ったら危ない

そう呟きつつメモリーをメモリーケースにしまう

ふと、人の気配を感じ振り替えるとそこには霊夢さんが立っていた

「あんた、何者? あんな怪物を倒すなんて」

『俺はシンカ、仮面ライダーシンカだ』

「仮面ライダーシンカね、一応お礼を言っとくわ、里を助けてくれてありがとうね」

それに頷いて返す

「所で、さつきの化物は何なの? それを退治できるあんたは何?」

『まだ、俺も知らない』

そう言っつて、霊夢さんから逃げるように森の奥へと進んだ

あのあと、変身を解いてベルトをリユックにしまい里に戻り霊夢さんと合流して神社へと帰った。霊夢さんに心配されたが怪物から逃げてる時に仮面ライダーシンカと言う人に助けられたといったら、何やら考え込むようにしていた

僕は、これからどうなるのだろうか

そんなことを考えつつ、僕は神社の縁側から空を見上げた

心side

シンカに変身してから2日たった

里の人に頼んでいた家を見に行き、霊夢さんに紹介してもらった香霖堂には外の世界の物を仕入れているらしいので、僕の家にあった冷蔵庫や調理器具に似たものを購入した

オーブンやテレビ、パソコンがあったのはすごく驚いた

また、アイス屋とかで見る保冷のガラスケースやソフトクリームを作る機械（名前知らない）もあったので購入した

他に生活用品やケーキ、アイス等に使う材料を買った、看板も出来ていて後は明日飾るだけだ

それにしても、あつちだ僕のいた世界と僕の私物どうなってるのかな？

捨てられてたり……してるかもなあ

レシピ本とか結構買ってるし、まあほとんど覚えただけど

やっぱり心配なのは、あの手紙なだよなあ

「イツセーいる〜?」

いつも通り、部屋で過ごしていた俺のもとに急に母が入っていた

「何だ母さん、何かようか?」

「ええ、この前に心くんからケーキ貰ったでしょ?」

「ああ! すごい旨かったよな、さすが心兄さんだよ」

そう言ってみんなでケーキを食べた時を思い出す

アーシアや部長達も驚いてたっけ?

「実は今日の晩ご飯に肉じゃがを作ったんだけど、タッパーに入れるからお裾分けに行ってくれないかしら?」

「分かったよ母さん、行ってくる」

そう言っただけで俺は家を出て歩いて心兄さんの家へと向かった

心兄さんのいるアパートの階段を上がり、心兄さんの借りている部屋をノックする

「心兄さん、いる?」

時間帯は三時半、心兄さんが必ず家にいる時間帯だ

だか、何時までたっても返事が帰ってこない

その時、隣の家の扉が開きアザゼル先生が出てきた

「アザゼル先生」

「おう赤龍帝、お前も心に用事か?」

「お前もってことは先生も?」

「ああ、新しく発売したコイツの組み立てを手伝って貰おうと思ってな」

そう言っただけでアザゼル先生はプラモデルの入った袋をちらつかせる

「まだノックしてねえのか?」

「いえ、したんだけど心兄さん出てこないんだ」

「そいつは変だなあ、心は何時もこの時間は部屋でケーキ作ってるかレシピ本見てるはずなんだが」

そう言つてアザゼル先生がドアノブに手をかける

「アザゼル先生、心兄さんは出掛けるときは何時も必ず鍵を閉めるんだ。だから」

ガチャ、その音と共に扉が開く

「おい、、、こいつはどうゆう事だ」

「っ!?!…………心兄さんの靴がない」

玄関、心兄さんの何時もはいている靴が消えており残っているのはサンダルのみ

「赤龍帝、中を探すぞ」

「、、、はい」

本来ならこんな風に心兄さんの部屋を見たくはなかったが、あまりにも不自然のため、アザゼル先生と共に部屋にはいる

「おいイッサー、俺は寝室を見てくる。お前はリビングを頼む」

「はい」

リビングの本棚にはふせんが張られたケーキのレシピ本ならび、棚にはプラモデル。キッチンにはケーキを作るための道具が沢山あった

そんな中、リビングの勉強机に封筒が置いてあることに気付いた

「なんだこれ、手紙か?」

俺はその封筒を見ると、中に手紙らしき物が入っていた

中の手紙を開き、文に目を通す

この手紙を読んでいる人へ

この手紙を読む人がいると言うことは恐らく、僕はもうこの世界にいないだろう

僕は昔から自分がこの世界にとってのイレギュラーだと感じていた。

本来なら、僕はこの世界にはいけないんじゃないかと、何度か思うことがあった。

ある時に僕は現実を知り、昔からの夢を諦めケーキ屋を目指した。みんなが笑顔になるようなケーキを作れば、この世界に認めてもらえるんじゃないかと。

イレギュラーじゃなくなるんじゃないかと。

だが、世界はそんなイレギュラーである僕の事を許さなかったのだろう。

悲しい、でも今まで生きてきて楽しかった

少しでも、僕の作ったケーキで笑顔になってくれた人がいるなら僕は満足だ

僕が最後に作ったケーキを食べてくれた皆へ

どうか、僕の事を忘れないでね

神城 心。

「なんだよ、、、これ」

俺は手紙の内容に絶句し、そう言葉を呟いた

「おいイツセー、そっちは何か……………どうした」

すると、寝室を見てきたのかアザゼル先生が戻ってきていた

「アザゼル先生、これ」

「なんだ？」

そう言つてアザゼル先生は心兄さんの遺書らしき手紙を見る

「あいつ何時もニコニコしてるくせ、こんなことを考えてやがったのか」

「心兄さんは、何であんなに笑顔でいられたんだ」

「おいイツセー、取り敢えずオカルト部全員にも連絡しろ。まずはオカルト部で話す」

「は、はい」

「で、どうして集められたのか教えてもらいましようか。」

「おいイツセー、お前こいつらに話してなかったのか」

「……………」

「おい！」

「っ！なんですかアザゼル先生」

「お前、全員に話してないのか？」

「は、はい。取り敢えず皆を読んでからと」

「そうか」

「イツセーさん？大丈夫ですか？」

「アーシア、大丈夫だ」

「今回、お前らを呼んだのはこいつ神城 心についてだ」

そう言つて先生はテーブル前に俺と心兄さんで遊びにいったときの記念写真を置く

「知り合いです」

「ぼ、僕もですう」

手をあげたのは小猫ちゃんとギヤスパーだった

「お前ら心兄さんと知り合いだつとのか!？」

「はい、よくケーキを貰つてました」

「ボ、ボクも同じですう」

「心兄さん、ケーキ作りすぎの多くない」

「大体わかつた、ここにいる全員が最後に心を見たのはいつだ？俺は2日前だ」

「俺も2日です」

「私は2日前ですな」

「僕も2日ですう」

「昨日あつた奴はいるか？」

「き、昨日メールを送ろうとしたら圏外でおくれませんでしたあ」

「ケーキを食べていたので会つてません」

「会つてないです」

すると、アザゼル先生は心兄さんの遺書らしき手紙をだし、小猫とギヤスパーに見えるよう置いた

すると、小猫ちゃんとギヤスパー以外の全員がその手紙遺書を読む

小猫とギヤスパーは驚愕し、リアス先輩達はよくわからないのか、普通だ

「ついでだが、2日前にあつた奴は拳手して何をしたのか話せ。俺はケーキを貰つていたが、特に変わった様子はなかったな」

まずは俺が拳手する

「俺は心兄さんから作りすぎたつていつてケーキを貰つてました」
次に小猫ちゃんが手をあげた

「メールを貰って、公園でケーキを貰いました。心さんは特に変わったところはなく、何時も道理でした」

次は、ギヤスパーク

「ぼ、僕は秋葉の帰りにメールを貰って、駅でケーキを貰いました。」

『秋葉!?!』(ギヤスパーク以外)

「は、はい」

「お前、秋葉いつてたのか……………」

そう呟いたとき、全員の共通点に気付いた

「この手紙の『僕が最後に作ったケーキを食べてくれた皆へどうか、僕の事を忘れないでね』って俺とギヤスパーク、小猫ちゃんとアザゼル先生の事なのか」

「!?!?!」

「それなら普通の自殺でしょ、何で私達が集められたのかしら」

「そう決めつけるのは、まだ早いぜ?この文に『自分がこの世界にとつてのイレギュラーだと感じていた』とあるだろ?」

「ええ、それに何かあるの?」

「ああ、恐らく心は神器、それも強力な奴を持っていたと思う。心はその神器の事で自分がイレギュラーだと感じていたんだろう」

「それで?」

「それほどの神器だ、墮天使や眷属狩りをしているやつらに目をつけられても可笑しくない」

「ツ!?!」

そこで俺は昔に墮天使に殺された事を思い出した

「心は何者かに襲撃される事を想定し、俺らにこの手紙を書いたのだろう、俺らに迷惑をかけないよう……………」

「!?!?!」

心兄さんがそんなことを考えていたなんて。

俺にもっと力があれば心兄さんを守ることができたかもしれない

俺らが頼りなかったから、心兄さんは

「近くの町を探すぞ、心は殺されはしないだろうが…………洗脳される可能性がある」

「墮天使や悪魔あいつらに利用される前に心を救い出すぞ」
そのあと、明日から放課後に隣町などを搜索することになった

心 s i d e

朝、日差しが差し込むなか布団から起きて延びをする

そして朝食を済ませケーキ作る

今日から僕のお菓子屋さん、【まごころスイーツ】を開店する

夢だった店がこんなに早く持てるなんて

この日のため、いつもより早く起きてケーキを焼き作ったのだが
………また作りすぎてしまい

保冷ケースのうち

シヨートケーキ6割、チョコレートケーキ2割

そして残りの2割は僕の作ったクッキーやカステラ

「うくん、ケーキが多いなあ」

まあ、もしもの時は霊夢さんとかに差し入れよう

そんなこんなで店の方の入り口の札をオープンにする

「さて、まごころスイーツ開店です！」

~~~~~青年営業中~~~~~

「お客さん来ないなあ〜」

悲報、お客さんが来ない

そりやあそうか、広告や宣伝なしで急に始めたんだし誰も怪しいと思っつてこないか

その時、来客を告げる音がなり僕は扉の方をむく

「いらっしやいませ」

入ってきたのは、頭に王冠？と青い服、そして手にはしやく？をもった少女だった

「失礼、ここは何のお店ですか？」

「えっと、看板見なかったです？」

「見ましたが、すいーつ？とは何ですか？」

幻想郷ってあんまり英語来てなかったり？

するのかな？結構英語の店あったから使えるかと思ったんだけど

「えっとスイーツはお菓子です、ケーキとかアイスとか」

「なるほど、そちらがそのお菓子ですか」

そう言っつて保冷ケースを指す少女

「はい、全部手作り。美味しいですよ」

「なら、そうですね……このショートケーキとチョコレートケーキを2つずつ、そしてこのソフトクリームとやらをお願いします」

「ありがとうございますー！」

そう言っつてまずはソフトクリームサーバーを起動して買っつておいれたコーンに入れる

ゆっくりと慎重に巻いていき、完成したソフトクリームに小さいプラスチックのスプーンを指す

練習しておいよかった

「まずはソフトクリームをどうぞ」

「ありがとう」

そうして少女がソフトクリームを食べている間にケーキを紙箱に入れて袋に入れる

そして、お客さん一号だからクッキーを数枚袋づめしラッピングしたのも入れる

「お待たせしました、此方です」

そう言っけてケーキの入った袋を渡す

「ありがとうございます」

「こちらこそ！またのご来店をお待ちしています」

少女が帰り再び店には誰もいない状態になった

その時、ドアが開き白髪の男性が入ってきた

「やあ、心くん」

「いらっしやい、霖之助さん。どうしたんです？」

「なに今から無縁塚に行こうかと思ってね、心くんも一緒にどうだい？」

「無縁塚？って確か外の世界の物がたまに落ちてくるところでしたっけ？」

「ああ、その通りだよ」

「行きます、面白そうですし」

そう言っけて近くに置いてあるリュックを背負う

「いいのかい店は？」

「ええ、全然人が来ないので大丈夫です」

そう言っけて外に出て札をクローズにする

「それじゃあ行こうか」

「はい」

~~~~~青年達移動中~~~~~

大量の墓ばかりあり、霧のあるここ無縁塚は外の世界の他にも三途の川とかにも繋がるらしい

こんなところで僕らは外の世界から流れ着いた物を漁っていた

「おや、これは?……心くんこれはなんだい?」

霖之助さんはそう言って四角くて平たい物をこちらに見せる

「これは、日記帳?」

「なるほど、さすがに見るわけにはいかないし、捨てておこう」

そう言ってノートを近くに置く霖之助さん

そう言って近くの物を漁っていると、すごく大きな箱が並んでいることに気付いた、所々に土がついていて書いてある文字が見えなくなっている

「流石に持ち帰れないなあ、この大きさは」

そう言う霖之助さん、僕はそれを危機ながら箱についてある土を払う

すると、銀色の鎧を纏った戦士が映っていた

「……………な!?これは!」

「どうしたんだい?」

「仮面ライダーブレイドのコンプリートセレクション!何でこんなところ!」

仮面ライダーブレイドのコンプリートセレクションが箱ごと捨てられていた、持ってみる

「ちゃんと中身がある、こいつはラッキー！」

前の世界じゃあ中々手が出せない物を手にいれて僕のテンションは上がりまくりである

そうやって一人で舞い上がっていると

「えーと、説明してもらっていいかい？」

あ、霖之助さんの事を忘れてた

「はい！これは仮面ライダーブレイドってゆう作品のおもちゃの最高級のものなんです！しかもこれは普通に一万円以上するもの！なんですよー！」

そう説明すると、霖之助さんは考え込むように顎に手を乗せている
「はっーもしかしてここにある箱全部コンプリートセレクション!?」

僕は急いで箱の土を払い落とす

すると、赤い体で頭にはクワガタのような角を持つ戦士が描かれていた

「これはクウガのコンプリートセレクション！」

続いて隣の箱の土を払う

「こっちは仮面ライダークウガとブレイド、ジオウのDVD！」

何てことだ、無縁塚は宝の山だったのか

「心くん」

なにやら、考えが纏まったのか霖之助さんが話しかけてきた

「さっき見つけた…コンプリートセレクションだけ？それなんだけど君が見つけたんだから君が持っていた方がいい」

「い、いいんですか！」

「あ、ああ。それに僕の店で売っても買う人がいないだろうし、君が貰った方が物たちも喜ぶだろうからね」

「ありがとうございますー！」

そう言つてDVDをリュックに入れて箱2つを持つ、結構重いな
「さて、他になにか…おや？心くんこれは」

「ジュラルミンケース？」

そこには小さめの銀色の箱が置かれていた

「開けてみますね」

そう言つてジュラルミンケースのロックを外し、開く

そこには五枚のカードが一枚ずつと、それを入れるケース？が保管されていた

「何だい、これは？」

「わ、分かりません。いったい何なんだろうこのカード」

そのカードには剣を持った戦士、魔法使い、槍を持った戦士、ナイフを持った暗殺者？そして狼のような獣が大きな剣を持っている絵がそれぞれ五枚に描かれていた

カードを手に取り、カードの裏側を見る

霖之助さんも気になるようで、僕の持ったカードを見る

そこには剣を持った少女が描かれていた

「お、女の子？」

「せ、Sabber？どうゆう意味だろ」

「恐らく、その面が表なんじゃないかな？確かそのカードの裏には剣士が描かれていたよね」

カードを裏返すと確かに剣士が描かれていた

「確かに」

それにしても、なんだろうこのカード達

ジュラルミンケースに入ってるからただのカードではなさそうだし

「ど、どうしましょうこれ？」

「さ、流石に僕もこのようなケースは始めだがそれも売り物にならないそうだし心くんにあげるよ」

「は、はい。取り敢えずケースごと持ち帰るのは無理なのでこのカードケースに入れますね」

そう言つてカードをケースに入れてからリュックに入れる

「さ、他のを探そうか」

「はいー」

そのあと、とにかく色々な物を見つけた

ピアノ、水筒、カセットコンロ、パソコン、自動販売機……

本当に色々なものがあつた

僕も霖之助さんも良いものが手に入ってよかった
それにしてもさっきのカード達は一体なんなのだろう？

くくく青年達帰宅中くくく

無縁塚から帰り、まごころスイーツに入りお礼にケーキやクッキー
をあげた

「ケーキまで貰ってすまないね、それじゃあまた。」

そう言つて霖之助さんは帰っていった

時刻は夕方、考えなければいけないのは

「このケーキ……どうしよう」

そう、困ったことに今朝作ったケーキのうち約七割が残るとゆう事
態におちいつてしまった

「……コンソレ開けよう」

僕は現実逃避を始めた

「最初はブレイドをあげようかな」

箱を開けると、中にはブレイバツクル、ブレイラウザー、ラウズア
ブソーバー、ラウズカード

全て壊れてない、早速遊ぼう

三つに電池を入れる

何で電池を持つてるかって？無縁塚で拾った

「よし、完成だ」

そのあとはブレイバツクルで変身、BGMありで変身、ブレイラウザーのカードスキャン、ラウズアブソーバーでのジャック、キングフォームへの変身を繰り返した

「……………満足、そう言えば」

ブレイラウザーにラウズカードじゃなくてあのカードをスキャンしたらどうなるかな？

まあ、エラーか反応しないのがオチだけだね

ブレイラウザーを逆手に持ち、先程のカードのうち、剣士のカードを選んで持つ

ブレイドだから剣士を選んだんじゃナイヨ？

「まあ、やってみますか」

カードをリーダーへとスキャンする

『ピ。ピ。ピ。……………』

「やっぱりなんない」

『Servant Saber!』

「へ?」

サーバントセイバー?何だそれ

次の瞬間、目の前に三つの光の円が現れて開店を始める

「ウェツ!?ちよつと待って!ストップ!!」

そして円が集束して今まで以上の光を放つ

思わず両腕で顔を隠す

……………もう、大丈夫かな?

「一体何が起きたんだろ?」

そう眩きながら腕を離すと、底にはカードに描かれていた少女が立っていた

「はじめましてマスター。セイバー・リリイと言います。まだ半人前の剣士ですが、これから、末永くよろしくお願いします」

「はい?」

「マスター?セイバー?リリイ?何だこれ?」

幻覚?ケーキの残りやコンセレの事で疲れてるのかな?だよね?

じやなきやこんなこと起こるわけないよ、よし休もう、少し寝れば、うん、明日になればきつと失くなってるよ」

「マ、マスター！・！しっかりしてください！これは幻覚なんかじゃありませんよ！マスター！！」

くくく青年混乱中くくく

「えと、それで君はセイバー・リリイと言って、サーバントと呼ばれる英霊？で、僕はそのマスター？ってやつなの？」

「はい！その通りです心さん、それにマスターの右手には令呪がありますよね？それはあなたが私のマスターである証拠です！それに召喚されるのを待ってるサーバントがあと四体います。早速召喚しちゃいましょう！」

そう言つて四枚のカードを見せるリリイ

ん？待てよ、他に4人も召喚出来れば、残ったケーキを消費出来る！

「分かった、召喚しよう」

そう言つてまず槍を持った戦士のカードをリリイから受けとる

「そう言えば、マスターは魔術師？ではないんですよね？」

「うん？そうだね、普通のパティシエ志望の学生だよ」

「ばていしえ？取り敢えずマスターは詠唱も無しにどうやって私を召喚したんですか？」

「詠唱？そんなの必要なの？」

「はい！」

「こ、これで召喚したんだけど」

そう言っただけはコンプリートセレクションの醒剣ブレイラウザーを持ち上げる

「マスター、それは聖剣？等の特集な武器なのですか？」

「いや、おもちゃだよ」

「お、おもちゃ!？」

「うん、おもちゃ。ただちよつと普通より高いおもちゃ」

「私、おもちゃで召喚されたんですか……」

「と、取り敢えず召喚しよう！ね！」

落ち込んだリリイをどうにか励ましてブレイラウザーを逆手に持ち、カードをスキャンする

『ピピピピ………Servant Lancer!』

その音声と共に先程と同様に三つの光の円が回転し集束する

そして、中から槍を持ったサンタ？のようか格好をした少女が現れる

「メリークリスマス！ マスター、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ・ランサー・サンタ、召喚に応じ参上しました！」

「え？ジャンヌ・オルタ、、何だっけ？」

「マスター、彼女はジャンヌ・オルタ・サンタ、、」

ねえリリイ、僕ら二人とも忘れてない？

「ね、ねえ君もう一度名前教えてくれるかな？」

「はい！ジャンヌ・おるたしやんたりやりや……ふぎや！ 舌、かんじやいました……」

そう言っただけを口を押さえる少女ジャンヌを心配するリリイ

色々突っ込みたいたいところがあるけど、取り敢えず言わせてくれ

「クリスマスはまだ先だよ？」

「トナカイさん、そこは気にしないでください」

「と、トナカイ？取り敢えず僕は心、神城 心だよ。よろしくねジャンヌちゃん」

「はい！」

「マスター、次の召喚を行きましょう」

そう言ってリリイは残っているカードを差し出す

「トナカイさんは聖晶石召喚ですか？それとも呼符召喚ですか？」

せ、せいしようせきぎっごふっ

どうゆうこと？！

「ジャンヌ・オルタちゃん、マスターはそれでは召喚しないんですよ」

「それでは魔力を？」

「え、えくとね、これだよ」

そう言ってブレイラウザーを持ち上げる

「そんなおもちゃで!？」

「見せた方が早いと思いますよマスター」

「う、うん。それじゃありリイ、カードを」

「はい、どうぞ」

リリイから杖を持った魔法使い？のカードを貰いブレイラウザーを構え、カードをスキャンさせる

『ピピピピ……Servant Caster!』

先程同様、音声と共に先程と同様に三つの光の円が回転し集束する
そして、紫色の服を来たまるでお伽噺話のアリス？のような容姿をしている

「ほ、本当におもちゃで召喚しちゃいました!？」

「ね？そうでしょ」

そんな会話をするジャンヌちゃんとリリイちゃん

「こんにちはすてきなあなた。夢見るように出会いますよう？」

「やあ、僕は神城 心。君の名前は？」

僕はしゃがんで目をあわせて自己紹介する

仲良くなるには、自己紹介からだからね

「うれしいわ素敵なお兄さん、私はナーサリー・ライムよ素敵なマスターさん」

自己紹介を済ませ、立ち上がりながらブレイラウザーを構える

「マスター、残りは二枚ですね」

「そうだねリリイ」

今度はナイフを持った暗殺者のような人が描かれていたカードをスキャンする

同じように光の円が高速で回転し集束する

すると、黒い外套と、ナイフを身につけ、頬に傷のある白髪の少女が現れた

「アサシン。ジャック・ザ・リッパー。よろしく、おかあさん、、、じやなくてお父さん!」

「マスター、子供いたんですか?」

「リリイ、違うからね?それと一応冗談だよね?」

「はい、勿論です。」

ジャックちゃんの目線までしやがみ頭を撫でる

「初めましてに神城 心。よろしくね」

「うん!お父さん。あ、ナーサリーライムちゃんにジャンヌちゃん!」

「ジャックちゃんもよばれたんですねー!」

「嬉しいわ!」

いや〜娘が出来た的な感じがするね、それにしてもあの三人は知り合いなのかな?結構なか良さそうだし

「さて、マスター。ラストですよ!」

そう言つてラストのカードを差し出すリリイ

カードには人狼が剣を持った姿が描かれている、そのカードを受け取り、ラストとなる召喚をするためカードをスキャンさせる

『ピピピピ……Servant Berserker!』

光の輪が回転を初め集束し、現れたのは

「へ!?わ、私!?!」

リリイに似た顔を持ち、メガネとマフラーコート羽織っており、文学系って感じかな?

「ヒロインX・オルタ……クラスはバーサー……セイバー、です。たぶん。」

「えーと、ヒロインXオルタちゃん?」

「はい、呼びにくければえっちゃん」と

「えっと、僕は心。神城 心だ、よろしくね」

よし、これで全員呼び終わった

「改めて、皆よろしくね」

「二二はいマスター（さん）二二」

そんなことで、五人の英霊？を召喚したことだし

「さて、皆揃ったことだしみんなに一つ頼みがあるんだ」

「私は大丈夫ですよ、マスター」

「私は大丈夫ですよ！サンタは皆の願いを叶えるので当然ですよ！」

「そうね」

「手伝うよお父さん！」

「私も大丈夫ですよ」

「よし、それじゃ僕に着いてきてね」

そう言つてリビングから、一階の店側のスペースへと向かう

僕の家兼店は一階の店、調理スペースになっていて、二階がリビング、キッチン、個室、バスルームになっている

階段で店側の電気を着けると、保冷ケースに入っているケーキが見えるようになる

「二わあ〜二二」

幼女三人はすぐく目を輝かせている

ショートケーキにチョコレートケーキ、クッキーにカステラが並んでいる

一方、リリイとえっちゃんは

「マスター？これはどうゆう？」

リリイちゃんはただただ困惑しているようだね

「見た感じ、前に食べてた高級和菓子より高級感が……………」

えっちゃんは、考え込んでるのかな？高級感？

普通のケーキだけ？

「それで、マスターこれはどうゆうことですか？」

「実は、スイーツの店を作っただけだよ……………お客さんが全然こななくて、余っちゃったんだ。だからみんなに食べてもらおうかなと思つて」

「こ、これマスターの手作りなんですか!？」

「お父さん凄い!」

「美味しそう!」

「さ、皆好きなのから食べていいよ」

「」「」「いただきます!」「」」

そう言って全員が一気に保冷ケースのケーキを食べ始める

よかった、これでケーキは大丈夫そうだな

それにしてもコンプリートセレクションのブレイラウザーは一体
どうして彼女達を召喚できたんだろ？

あれはあくまでもおもちゃで特別なアイテムではないはずなんだ
けど

「お父さ〜ん!」

考え込んでいると、ジャックがケーキ片手に此方に来る

「どうしたの?」

「お父さんも食べよ!」

そう言って服を引っ張るジャック。

「そうだね、食べようか」

今は彼女らとのコミュニケーションを取ろう

そう思って僕は彼女らとケーキを食べることにした

心side

朝、起きるとリビングだった

そう言えば、確か昨日はケーキを消費したあとに布団が二つしかなかったから、リリイ達はそっちで寝てもらって、僕はリビングで寝たんだっけ

ジャックは一緒に寝たいって言ってたけどさすがに布団を増やしてからじゃないと寝れないから断った

取り敢えず、朝食を五人分作るか

そんな感じでキッチンに行き、ご飯を作る

今日は、フレンチトーストを作ろう

そんな感じで卵を解いて砂糖と牛乳を少量入れてかき混ぜ、その中に食パンを浸す

パンを浸している間にフライパンを温めておく

それにしてもこのブレイラウザーは一体どうしてあんなことが出来たんだろ？

僕が拾ったのはCSM、大人のための少しグレードアップしただけのただのおもちや。

なのに、あの英霊達を召喚することが出来た。本来なら召喚にはマスターの魔力や聖晶石と呼ばれる石や呼符と呼ばれるお札がいるらしい

僕の場合はどれにも当てはまらない。一体なぜ？

そういえば、霖之助さんって『物の名称と用途が分かる程度の能力』を持つてるんだっけ？今度見てもらおうかな

「お、そろそろいいな」

フライパンにバターを落とて、つけていた食パンを入れる

すると、食パンの焼ける音と共に砂糖の甘い匂いがキッチンに広がる

焼けてきたらひっくり返し、焼いてから皿に移すのを五回、全員分焼き上がったところで振り替えると、皆が揃って此方を見ていた

「おわ！お、おはようみんな、起きてたなら言つてよ」

「おはようございますマスター」

「朝ごはん出来たから、運ぶの手伝つてくれる？」

朝食を食べた後、僕は香霖堂に来てい

ブレイラウザーはラウズホルダーをズボンのベルト横に引っ掻けてそこにブレイラウザーを着けていた

リリイたちには店番を頼んでいる

ケーキは昨日よりは少なめに作った。お客さん来ないと思うけど

「いらつしやい、心君」

「霖之助さん、こんにちは」

「今日は何のようだい？」

「これを見てほしいんです」

そう言つて僕はブレイラウザーを抜いて霖之助さんに渡す

「おや？これはどうゆう？」

「実は、」

~~~~~青年説明中~~~~~

「なるほど、そんなことがあったのか」

「はい、とてもおもちゃに思えなくなってしまつて、でも原作ならその剣は100キロ以上あるので、持てないはずなんです」

「少し待ってくれ、今見てみるよ」

そう言つて霖之助さんはブレイラウザーのあちこちをさわつたりする

「心くん、たしか君は『進化する程度の能力』だったよね」

「は、はい。そうですけど」

「調べた説明をするよ、この剣の名前は『醒剣ブレイラウザー』仮面ライダーブレイドの使用する醒剣。片手剣であり、持ち手の近くにはラズカードをスキヤニングするためのスラッシュ・リーダーが存在している。切れ味は鋭く、高熱放射と高周波振動で切れ味を倍増させたヒーティング・エッジとオリハルコンプラチナを極限まで研磨したオリハルコン・エッジの刃は地球に存在するすべての個体を切り裂くらしいね」

「それじゃ本物、」

「君の能力が何らかの形で関わっているのかもしれないね」

「そ、そうですか」

本物？みたいだけど、重さは普通のおもちゃと同じぐらいなんだよな、まあ護身用に使えばいいか

霊夢さんの話だと、熊とか狼の妖怪が出るらしいし

「霖之助さん、ありがとうございました」

そう言つて香霖堂が出る

「ちよつと試してみよう」

そう言つてブレイラウザーを引き抜き逆手に持ちカードデッキを広げ、MACHのカードを抜けとり、スライドする

『ピピピピ……MACH!』

そうして走り出すと、いつもよりも何倍も早く走ることが出来たら本当にブレイラウザーが醒剣<sup>本</sup>ブレイラウザー<sup>物</sup>なつてしまつたらしい

「それにしても、お客さん全く来ないわね」

「まあ、宣伝とかしてないですからね」

そう言つて店に来た霊夢さんと話をする

霊夢さんの左手にはアイス、右手にはチョコレートケーキを持っている

あ、リリイ達は皆で自分の服とか買いにいつてる。さすがに女物の服を僕が買ったら女装趣味がある人と思われるからね

「はあ、何かいい考えないですか?」

「そうね、、食べる所を作つたらどう?」

「なるほど」

なら、折り畳みのテーブルと椅子とか店外にはパラソルの着いてるテーブルと椅子設置してみようかな、確か香霖堂に売ってたはず

「試してみますね」

「ええ、その方が私も楽しね」

「ええ、まあいいけど」

「所で、あんた弾幕勝負しないの？」

「へ？弾幕勝負？何ですかそれ」

「そう言えば説明するの忘れてたわ、弾幕勝負ってのはね」

~~~~少女説明中~~~~

「なるほど、つまりは先程見せてくれた光の弾、弾幕を使ってバトルするってことですか」

「ええ、弾幕は魔力や霊力なんだけど貴方はどちらもないのよねえ」

うくん、弾幕の代わりか……なら

「弾幕の代わりみたいなのがあるんですけど」

「そんなのがあるの？」

「はい、多分。」

外に出て、ラウズホルダーからブレイラウザーを引き抜き、逆手に持つ

「前から気になってたけどそれって？」

「はい『仮面ライダーブレイドの剣』の醒剣ブレイラウザー……のおもちゃだった物です」

「……だったもの?」

「はい、何か僕の能力が関与して本物に近い物になってしまつて。え、とあの木に撃てばいいですか?」

「ええ」

了承をうけ、僕はカードデッキを広げ、中からTHUNDERのカードを引き抜き、スライドする

『ピピピピ……THUNDER』

「はあ、ディアサnder!」

剣を構え、引き抜く感じで目の前につき出す

すると、剣先から青い雷が発生し木に命中する

「うーん、なんと言うか弾幕、ではないわね」

「そ、そうですね」

まあ、確かに弾幕つて言うより電撃だもんね

「そう……ちよつとその剣貸して」

「へ?はい、どうぞ」

すると、霊夢さんは空中に弾幕を一つ浮かばせてその前に立ちブレ
イラウザーを構える

なにをするんだろう?

「よいしよつと!」

ズバツ!

霊夢さんがブレイラウザーで弾幕に振り下ろすと弾幕は真つ二つ
となり消えた

「へ?弾幕が切れた!」

「やっぱりね」

『やっぱり』つて、この事がわかつてたのかな?

「霊夢さん、どうして弾幕が切れるつてわかつたんですか」

「そんなの勘よ」

「勘、ですか?失敗してたら僕のブレイラウザー消えてたんですけ
ど……」

「ま、まあ成功したんだからいいじゃない、それにそれさえあれば弾幕
勝負挑まれても負けはしないわよ」

「無理ですよ、僕は剣を持ったことが無いんですから」

そう、僕は今までおもちゃの剣を持ったことはあるものの、他は中学の授業で少し剣道をしたぐらいだ

聞くによれば、弾幕は大量に張られるし、レーザーの様な物もあるらしい

そんな付け焼き刃で弾幕が捌ききれぬ訳が

「なら、さっそく特訓ですね！マスター」

「え？」

振り替えると、リリイ達がいた。買い物帰りなのか、大きな荷物や服の入った袋を持っている

「あら、良かったじゃない心。」

まあ、英霊に教えてもらえば少しは出来るようになるかな
そんなことを考えながら、今日も1日が過ぎていく。

この平和が、ずっと続いてくれたらいいのに

???
s i d e

真つ赤な部屋の中、王の間と思われるそこには明かりはなく、三つの影と大きな魔方陣が展開されていた

「■■■■、準備が整ったわ」

「……………そう、■■■■準備はいいかしら？」

「はい、お嬢様。」

「幻想郷こそ我が約束の地……………人よ、妖怪よ、お前達の運命は我が掌の上にある。夜を統べる我が力にひれ伏すがいい……………！」

そう言つて、お嬢様は呼ばれた少女はその魔方陣を起動した

???
s i d e

地下の一つの牢獄のような部屋

私はそのこのベットのの上に座っていた

どれだけこの部屋にいただろうか、いつにならつたら私はそとに出られるのだろうか

「さて、今度は……………お？君、面白ね」

「だ、誰?!」

見ると、そこにはフードを深く被った怪しそうな人間が立っていた

「僕？僕は君の願いを叶える妖精さんだよ！」

願いを、叶える？

怪しい、そう思った

そもそも、どうやって私の部屋に

門は■■■が守ってるはずだし

でも、私はそれにすがりたくなってしまうた

「ほ、本当に願いが叶うの？」

「もちろんだよ！このボタンを押して使えば、君はその為の力を手に
いれる」

そう言っつて、そいつは四角い何かを渡してくる

ふとあいつがいたところを見ると、あいつが消えていた

「何だったの」

そう呟き、四角い何かを眺める

『それを使えば君はその為の力を手にいれる』

私はその四角い何かを握りしめる

私は……………

「せいー！」

リリイの振り下ろす剣をブレイラウザーで下から上へと切り上げて弾く

「やあー！」

そして、剣をお互いに構え何度も剣を交える

「ふう、今日はここまでにしませうか」

「あ、ありがとうね」

そう言つてブレイラウザーを腰のラウズホルダーに戻す

あれから、毎朝リリイに剣の扱い方を教えてもらつてる

あれから少しは出来るようになってきた気がする

「マスター、少し剣の扱いに馴れてきましたね」

「そうならいいなあ」

そう思いつつ、家に入り店の準備をする

剣を学ぶのは少しでもブレイラウザーを使えるようにする、そして
仮面ライダーとして戦えるようにしなければいけない

幻想郷を守るよう

今日もまた、僕はケーキ屋を始める

あれから少しだけ店に来てくれる人が増えた

店でケーキを食べた人の笑顔を見ると少し頬が緩む

そんなとき、ふと暗くなった

「え?」

空を見ると紅い霧が空を覆っていた

「何だ、これ?」

店に来ていた人達も、その事に慌て走って帰っていく

「マスター!」

「み、皆! 大変なんだ、空が急に」

ふと呼び掛けられ、振り向くと英霊の皆がいた

しかも皆呼び出されたときの鎧等の姿になっている

「マスター、どうやら大きな異変が起きているようです。私は皆と里を守るために見回りを行います」

「大きな、異変?」

「はい、私は里を守ります。これでも騎士見習いですから心配は要りません、マスターは原因を調べてください。ジャックちゃん達はお店をお願いします」

「分かったわ」

「うん」

「了解です」

そう言っでそれぞれの元へと向かう皆、僕も急いで霧の発生してき
た方に走り出した

い
もしかしたら、前みたいなメモリーを持った人がいるのかも知れな